源氏物語 二

№541

九曜文庫

[illegible]

[illegible]

花のちる

あるしのと

ひらき

花ちる里

松の風

[illegible]

橘花巻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

若紫巻よりおのおのまきと
おもふも似ぬかゆかりし
夕顔の巻よりつゞきて数給れ
詞とうけり。若紫巻は三月
に北山のなにかしつらよりはじめて
かゝりけれは若紫巻より
おのおのまきとしつゝ夕顔の
巻よりつゞきてうけたまへり。
夕顔の巻にしるしとなし　末摘
の巻はことにみるもめくるを
夕顔に引くゆかりある人

をやみならのみと
さるものゝことをさをぬ紅葉の
御紅葉賀上巻の次と
いまはけに司るね比翼琴れい
さいて文京を桃よみのいとし
さいふるゝのと戦をいさむらん
なるり。
いとふかき事なれは人の　若紫
為にかゝりぬるものなれと
この帖はこの帖のみにそなはりて
名にふさはしく人のすくれし世

あうすまゐして
情なとなくゆめやかさ　あまり
寔のかくれたるてつきをかれる
とく散くとも
ほのかれぬみえしれぬ御事は
内中川まて一夜のまかりは
君恵のかのもとにて右衛の尼君
のかのつきにおかはしたりしは
たち給ひぬとて内にかへりけり
かくとゝけれ右大輔のもとに
ゆかり　王羲之紀倫ゐくに

王維詩録之
故人陰のみこそ此寺に御わたりく
ゆうしうかりつきゆかし北窓
参る大輔の内にまへ來る寺にて
侍るかくと
かいもそめ　潜　潜龍未力
この友まてとこへるや　酒と
白氏文集北窓三友
今日北窓下　自問何所為
欣然得三友　三友者為誰
琴罷輒挙酒　酒罷輒吟詩

三友逓れ脩環世已然
一弾指中二一瑚蝶四友
倘恐中有間以解脱之

あはれなりや
あら悲しやつれなの有様や
[illegible]心地ぞあり
余所にて見ての後に
かの所に[illegible]物語
[illegible]女中将姫の母君
は女[illegible]の[illegible]女一
人あり[illegible]

はしらひてたゞ人の庵りあり
[illegible]都をはなれて山の
奥[illegible]ありて[illegible]
[illegible]て此家の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]此女のみ[illegible]て
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かりに帰りて俳諧をあそひしを
まためつゝの俳諧の道ハしるし
ミ清く風雅のいつくゆかしみ
是ハ此家にとゝまり俳諧
萬の所あるもあるに此方
物ハいかに風雅にて候
ある所有りハ凡所ありけり
まかしく中ゟ伺り俳
甘く生かし草木のあるよ
かく時とさとめ桃にかぎ
前ハ春をんはるゝ時の交こ

たとへば此ゆくに月影ハくもれ
るもちる物しるもちろんにハ
草葉にたえに光を庭と尋ね
種めてこれハかくつゝむ源氏の
かりと源氏の今かの候へは
て時だにもあまり新古今
からうてはをの俳にもそとて
然知ん
○俳諧との語は上まゝして
ハ滑稽なるを上下ハ滑稽
の詞也

○こと人ならん歌に　余波は涙
のちにこそまはりくの事と
○ゆきのたとへて　ゆくさき里
まことにまちの涙はなみとうて
よみて
△語に大内山の前もすとあり
中にたけもまこと
△里よりぬ影とはみまをとあり
里よりぬ月見えとみまをとて
人さまをはらぬくの月にて
里よりぬまとてむかしともへ

今に大内山雪申して
○眼すてしこゝろから出ぬを
君乃こゝにうつりてこゝろ
とふなと
○あまりて　山そはあやうし
きつふなと
○おきとりても悲しき　見てくれ
今まさと見つれと
○人のまこりのとおもて　中ゆの
なと御代のきみうしと里
ゆくいとの語とをやめましを

みそこなひをしてはをりまいらん
いくばくかまつ〳〵ぶぎやうと
ものゝとをもふもの　法師
はるばるとうちのぼりて
きたぶぎやうにあひまゐらせ
人々のまゐりたまふ　女房のと
やうにて男はのやまちにて
まゐりたまふ　きいたるのこと
りうとのぶぎやうと
ゆきあひまゐりと　あつやうと
らうらうにて　上前しきりもと

こゝまでだにはあるべきまと
けりやうとうにぶぎやう　男出
の一ぶのまゝと
もとえんにおいぬ　ゆきまれ
のぶとうと
ゆやうよ　ぬはけちもまと
ぶんにまつりぶぎやうん　末橋の
ぶぎやうとうとのぶぎやうと
とのぶぎやうと　法師はのの
とやうとぶぎやうと

ゆきまのまつなるのゆふし

かすみこめたりしよりの雨哉

名所の香　梅檀樹（ロシナンビエ）ハ草併也

春為夕香也（ウスツキナスヤムト）　薫陸香（ユニノカ）と云

衣被（ユニ）香也　蘭麝香也

いつみのはなのさかりはしにて

香の名は花の名にも言ます

あり香言よりして何にても有

かくし給ひて言をむすひし

まつしるしつ給ひぬまるをはなの

花の名と云

玉たれかくし　ことかつらハ

思ひなやみはてぬるな世

かれ玉たれかなし

めてたき花ころのん云

まつはなこころのんまつかえ

ゆ色のはなのまつほうのまさき

源氏のころ物語のこと

とえなまつかれるはあちかま

かさくいうて

ゆきよりハあさくて　宝の雅

それハこの源氏物語なれと

大ひろまの紙ぶすまのうえ
この世のものとも思われぬ美しさの
ありさまで、ちょうど第一と一足
早くて紅葉を用いたる
たいそうなる色合いの
記日 鐘鼓 左右 庭 琴瑟
左右
めでたき色紙へ、ひらがなを
ほどこされたるものの
きらびやかなること、極色
を尽くしたり

侍女たちの
ものがたりの
ようすなど 配膳 女房格
とりとめもなし
内蔵坊 女房一統
ものがたり 差使する所
なりや 長いものかな
女房たちの
装束を立行ひ
来たるべし
いかにとそうらう 夕紅葉

そのまゝ

いうにいはれぬ　いやもいはれぬ

普賢経

あんぜんたる　普賢菩薩　象鼻如　紅蓮花

白きはちすのごとくなり

ゆるしたる　紫ゆかしきもの

紫色と名付てあさき色

ゆるしたるとうふうなる

うすくこれ紫色なり

めるへしとも

あるはまたはまたはまたは　貂裘

昔と異用すれまれなり

如鼠　中宮女子

あるまたはまたは　高光かね

〈あるはまたは〉

夏の日とは山ばとるる

山鳩　尾もうをとん

こたいの白きはまたは　なほと

まさしき安てけりそうそうまた

殿上人判官なとも

△ね日乃ともれなりひハ宗
こゆるかりしもをゆかれとも
◦むくとおもひし 峨（ムコン）すてこ
◦ねれは宮のこあてけれ 松の宮ハ
ちろきもこそもしりつきち依
か見ハ何てくらのへくいわれ
◦いの人くハ らく乱るあらそ
◦あら何ま梅花しハ 若つかれ給ふまし
◦名まつ来れ 我袖ハ名ある色
ホの松山ら宮てしりぬれへぬ
りそかきこ

◦こゝたりおほゆきされ 半（カミタ）
人乃銀（ギンブン）分、 堂（トウ）れ枕すりも
◦ちる袖くこゝろ をみなへしを
あてかせて川ありをもんた
めすらむ
◦窓ともひとさけ 窓とめ
ひくすまてとみゆると
△ゆうまつられ 宮とて
あされ袖ホ 秋（アカ）ならヽ
◦ゆう乃錦ハ 山ちりかゝりけると
白氏（ハクシ）秦中吟（シンチウギン）ニ 幼（ワカ）者（キモノ）弁（ハカタキ）

不敬老者艱難温也
勤与意氣并入鼻
中辛

とづる　世を忍ぶ

内ノ人の井戸　さかりつる

清ましつる

ゆきのなかに上臈ひとり

ゆくもあり帰る者あり

あやまりまれ　合羽

こうきたうへい　合羽

ひらけたり　懐紙　奥列

ゆきの衣ぬいたる　ゆきの

ゆきの我後ゆきのうち衣の

ゆきのよりはい　ゆきの

ゆきの夜のうち　ゆきの

まんえんたり　ゆきの

ゆきの人だり　ゆきの

神宮ゆきの　あり

ゆきの人　神宮

人をあつ

ゆくもあり　ゆのまに

巻たちのうらとう色 かはぎと

ふらもの こと ふ きとのれ

かくらうへすと あまりのまた

の作と

とこやうもれえゆりすまりよ

とはれ色とふ花はてうれとうを

たくへいこまき紅をあすすこれ

物をあれぬ此はきさうを

今日ふとやうもとうと略ゆり

しを色とあるす えゆりをし

きこうれたうれたうれたうれい

楚色ふらきうりてうを

とうりおを色をもうきう方

やうきうと ゆきうえ

ふやいうしんうれけしもれ

色をあはい 人をとつい

うりうれ未だしもれをり

あるん 二首 あるへし

色こまき花と れとうてこま

花をみうをくとめてふう

ぬうふと あまこうとと

あ乃一花をうとをも方

[illegible]

たゝ所　女房たちのこと

くるゝや　さあるそのまゝ十羽と

たゝ物のもとにてみさ山の

そとのとをいとをく　なくらうれ

もとふる物のもとうつての法

つゝらごうごかきあつまりゐ

みさ山のもとにすてゝとの

紙つゝ記もちの家もちうてん

なりとまきけしひもちの家法

[illegible]

のもとにうつしたる　吉日　心

のもとにうつしたる　なこ　法

山もとにもとにひもちの家

のもとにいまゝ

[illegible]

りこのうちものをあひやみて

はきん　あるいは　千　法

つ羽とつてりてくる事

さしまき義　鼻　八十

ふもとにかりの　松　八十寺　紙あり

あるさづりて中をすり絶
ありそもとうんとそつの色い
海氏れ出すもとり合てうらい行
いかくも風俗とうる色
其文金海氏をこのうるわゆ
らひうん　哀れ人すれ
あるわれとうる中れ分
紅葉に中にありうるれ
あいわれとうへ色をそりる
ムムてそとりさりうるる行
りまるもうんと紅もうん

人をみるとうんと云と行ふ
まりあるあるつそりうれ
りなるとうるるふとうう
のそと

ひろわはこ　橋上絵

ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ
ゆうあるつそりうれ

[illegible]

雨ふりて梅ハ花にさきぬらく
あらたまの年立かへる朝より
またるゝものハ鶯の声
花の香を風のたよりにたくへてそ
鶯さそふしるへにハやる
夢のうちに　こそてハ我とそれを思ひ
きそや夢のうつゝとそれとみえしより
我ハ身のかなしきよしをしらせはや　誰よしれまれ
のきは　花ある所は我都とおもふ

おもひきやそのかみまてとくらさりき
祖母の服のまゝ　夜ふけあさき
やりとハさるかたのいとしく
まつりの時に宿まゐらるとて
宿りしける　宇治左大臣
年ころいひける平仲女のもとに
かきなよとてそちのよと鷺阿古
中宮のそのとされよりきて
女になりてなきてさかりて
なりける人につくれハ女
かくさとみえしより我

まつさハ君のみをもとをも
くもすゑはしらせ給ひぬよ
あしらんハ何の色かんあかかんハ
此てすかんとふかんと
○梅ハ花を　梅ハやうくも
あたりをうと
△紅梅さへ何やうきゆかしの
まうと　白梅とはいふ花　梅の
それ銭をおろしとたのむ
ありけり
○たのむべし　仁和寺の御所

寺次てにハ宇多院よりゆるさる
法ハとせんのたつえらぬこ
とかしとはかとまゝ吏
評まゆるてへの菊僧君
様を二たそうへとかれ
きを階段との風聲を
東の君にかきとて花は
まより上法師御めし来
ゆかり

△百業賀表

一表とは年を名とし仮借業
の百業かゝるとゝもゝ
ゝ花寓巻とも法花
業とあり又農業巻
の業院は華の所と朱雀
院の百業仮借なること
明らかなりとあり
あり年巻名のゝ
ゝ法花経とも称ず
の百業あり又百井寓

夜乃ちかしり行くありつゝ音
契といふもあり萬契は附
又梅契をとこみゆしもあり
しらぬ名目を付たり
菩薩僧のり名は五十乃誓
ありべし
青海波とて衣裳にも波
のもやうに波をかけたるを
まなといへり 浪と名付たるまゝ
名にたつは行くのつれ涌なり
たいて識樂らくの舞調

樂におほくあり
紅のは迦陵頻伽のこと 法花経曰
天中天迦陵頻伽声
此鳥在卵声勝衆鳥
曲ともおもかれ 樂にとり
よ吹くろふまゝ
林るとそ 川をしく行きは
正親町の西井川行来と留
小路は休所の靭のまゝ作
内七業の舞曲のまゝし
まもれ行くいつゝ流へ去ル

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゞ面いかゝと　辨ていわりと

かゝるの時代を面りて

ものをそなへて　詳もうるはしく入りの時を

そなうるかをまつり

世ゝ二村山と号る人ゝ有りの

のゝ名やうに面ゆきと

むり毎ゆり事也　若し和ゝ

すゝまと紙ゝ筆ん等せ世ゝ和

きまるゝ乃是

論語曰

匿恐友ニ生人ノ友ニ　尤丘明

恥丘亦恥

俗者面ゝの名ゝ

ゝも桐垂ゝ

ゝの時代　尼上の時代

ゝ多ゝ家面ゝ　第五交

富七

詩ゝ母ゝ八月　第上祖母

逝ゝ八九月ゝ　はゝ

九十日八十二月ゝ

除服ゝ八日ゝ

男ハ初冠ヲ元服ト云ヒ

清涼殿ニ元服ノ宣旨ヲ下シ給ヒ五位ニ

なりまして神ぞくの

ちなり　略之

うきよ物がたり　特ノ記ナル

ちやらくさて　通例　十二月晦

日ニ　ちやらくさて　毎ニ人

清めのためとして　掃ら　部屋

まて　初ル　目あり　男ハ　開ク

紙ヲ　懸　掃除ヲ　又　張

ヲ　古人　結ル　帯　ヲ

なるものと　解シテ　内裏ノ

門ヒロメ　ヒロメ　鬼ヲ　方ヘ　ヤ

ヲ　鬼ヲ　名ヲ

ハヒ　ヒ　文　ハ　ヒ　ヒ

名たり　紙　ハ　玉　帯

ハヒ　落花　形勢　西ヲ

名ヲ　ヒ

ヒ　ハ　門　高　ヒ　ヒ　ヒ

大晦日　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　詩

カノエニ　ヒ　高　ヒ　ヒ　ヒ

ヒ　ヒ

ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ

元三月朱雀
[illegible]
月[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

絵とはそれとも

平調とも

そこあるの調のてもつくへ

一越仕調とあり第

一越調とあるの一越

調ものの一越調に二拍と

あるものの一越調くらを

ものとなるへたつるの

ものと一越仕調とくらと又

はそろさりとは拍一越の

物と平調に四とはめるを

平調とあるとしてはもとも

つはてはそろくさりとしはの

てはそろくさりとしはの

さ四一越調くらを平

調とそ号と平調はもれは

調とそ号と平調はもれは

細絵巻第六絵巻絵

細絵巻絵とそ号あり中

絵十二絵とくらたへて

西方はもくらとすへよ

ものとも

ゆ絵一 ゆ絵巻 ゆと

一、宮ゝ　幼ゝ

一、此三ノ女房ゝ　宋女義人ゝ

うわ物ゝ　宋女義人ゝ

ゆゝうゝまゝれゝ　義人宋女ゝ

あゝゝゝ女房ゝ　元三ノ沙弟ゝ

此ノ沙弟ゝ　内膳司ゝ

ゆゝ宋女傳奏ゝ　義人

侍ゝ義人　信膳ゝ

今厨子所ゝ　宋女ノ中ヲ

ゆゝ選ゝ　選ゝ

命婦ゝ　命婦ゝ

の典侍ゝ　義人

宋女ゝ　信膳ノ

宋女ゝ　信膳ノ

内膳ゝ　内膳ゝ

小膳ゝ

ゆゝ義人ゝ

のたゝ

ゆゝ

内侍ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夜謫者　邪州宿
江秋月澄　徹隣船
謫者有　殺調堪愁
絶哥罷　繼洞泣
老面後　咽琴歌
人見有　婦顔如雪
独倚帆　檣立　娉婷

十七八夜渡似玉珠
双々明月蔵偽問誰
家婦謫泣何悲力
一問一語巾低眉竟
不説

文もとうつくしもつくへも
此文をとゝ宮ゐはゝ
かりしあり月ん着へもつくわ
しつりしとあり面流とあ
きのうしかりしかは流れん
ゆうりを経ちうる化

の方とうつくふと流れ方をて
流ハ鄙かしあつうつをあを
のやうしにハ似ゐ様ゐまを
鄙かしあハ十七ばかりあるを
流ハ鄙かしをうつくしく
あつうをとゐしやうにうつく
なりまゐまゐのあまりのなか
そうき我立ちあまをとを
をかりしもうつくしもつくれ
その上にうつくしをそ
きまを我やゝ流を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藍と云ふ物

うこそするのうと云ふ　源氏の

うこ神と

中将の、ちやと方

清水と坊の中清水うこそら

もとと第と名めて行つと

石川に流れしたるもしと

てうきまこうこ云ふる第と

もこのもしの中ふてうる

あるうこ川ちうこれあり方

元ちれを行りとあり

四ちうや世界よと

もとに世ちと紀行

うこの山ちと　ひとちこう

山ちう、清や川ちとこふく

我ちうちれ

ちやまま清ちく　頭少ねる黄（スミ）

首　立ちたちて立（センゲ）ちま

もちもの行と云と黄（スミ）立首

と紀行と云と

七月十五日の清　菊亟

四つ行り井ちを行ん　桐亟の

法門なり

うち家を坊とと 法泉院と

ごうさま殿 大伝と

長家はしる 朱葉院と

ひとまに家れる 源氏と

御てりのぶんは 源氏

かはんと

おそろしよ 物にとりつく

んと

法ゆたら四方をはらく

中宮のりゃうは 風聲は

ゆうあまもあり 藤式部

もとのぶまもあり 右衛門

より使ばしもあり

とりのぶと

二条院はうまこ 春宮母体

所と戸 内 氏神へ御てん

使をはらへ

法ゆまこ高のやうす

ムのやうす 家代まと

△花宮巻

汐とゝて巻ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

宴[illegible]

[illegible]

[illegible]

殿[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清涼殿御障子

そんあし　保元　二字

[illegible]

[illegible]　名ハ一字あく行と

うしなくしかりしかるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏物語

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
仕十七日[illegible]
長[illegible]へ[illegible]月[illegible]
[illegible]
[illegible]

宮仕する中に毎年はるもあ
府乃ぬし
いろくさ三月ばかりの
四月ばかりの月をまちて
ものとうちて月とあらそひ
なかめしに巻をかいあるに
と見るやうにあるに
三月ばかりつくりたる
えをもて接待あるのちに
枝をうちやりてうたせて
の方をうちまはしてあり

毎に見わたしたるもの
一部に多逆とて此世界
ものをかくしたるかん
かうるをいとあはれ
の月ばかりにたつる歌
るかりもかりはかりと
ありてうと行つると傷ましき
涙ぬ語といふ物をも
ものくもつきて一部と
ばかりかりと会ぬまと

いつか

たとへの思ひ人 性ありて

りしとき女の生ける女房

なら二ぞ

あるうに 貴川

ぬまの山のやうだまるや

うるはしきあるてあれば

はなちあるうさ沖て

川も高しあるいやそのの

うちうるひとうん

ふらりよりひて世

代とかん 陽成・元巻・六歌

能舞

ゆくもこうやうて 遠迹

人代のとき見るとも

もとうるもうるかに

いるかり

むるるとれるに 殺

ひりゆくて くこそあ目我

も若い男山の

ゆ物ゆもあり

ゆくゆ

小うれ 賜

結番かり

「はのちりのうんとや　みなれ
き山里ばかりもけたらぬ
ばかりさうまし

「はるとうの花　花ぶ栄し

「ちとうりはのうや　我有のも
とかりとうりとうと

「我有もうつくれ方

「やしたりまとと

「女子きはしもりの所るまい

「浄瑠璃姫姉のおりの所るまい

おりてはまに　おりかう　わとを
しいくはるはしもりの　ひ
「うつのはまき　ひの結ひ地名
はのもとをはとうもとを一色
もとをはとうもとを　菊本
とをはまきのりはれまこと
しまもうへのとうもうの
編　編はのまいもろぶ
のまとをはとうもとはとう
「ちりとうりはりて　ちりい祇と
祇　祇袴　とうと上らい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

袴[illegible]上下[illegible]も用ひまつる

[illegible]布袴[illegible]ハ御[illegible]

[illegible]

[illegible]

神はかくれたまふと
海氏系ハ神こいつてと田
行と神ハ蓮花をこゝろ女
房と神とあり此ことの世も
とをなを生すれ東氏ハ
きめ神とあり
ゆうこの世ハ
ゆうこの世ハ
ゆうこの世ハ
ありとゆうゆ
ゆうゆ
ゆうゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△葵巻

[illegible]

[illegible]

世中のうく

まりぬかの四つ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

だんなやうにて物しれり男
門徒法住とりて行てこゝへ
のやうすり
八幡まうでに八幡殿法
名を行たとゝ
八幡ちやかの池のごとき
せん坊長宗編退し行て
ゐた
禅宗にて名を
結ぬのまゝ毎日六宗門徒
すり禅宗法一代と一宗

色ゝ名を行て其者住ゐ
つゝを行て禅宗に成り
此者ゝ一まゝ作まり
ゝゝとゝゆゝまりてこゝを
りまゝりて住つゝりや宗家
の禅住ハ子法一初りり
東宗法一代一宗ゝりゝ
ゝゝたりまりまゝる
まりつゝのゝゝと法氏ゝゝ
つゝ宗ゝんゝ
ゝりゝんのゝりをゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第七

あさうの作者

源氏二つ[illegible]

[illegible]の夢[illegible]

の事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まゐりてすゑうち笠形の笠入
法花堂と二方はたちよりはたく
中の間目かちの村へまゐり法て
ゑ[illegible]ちこうい法花堂と廿三貫物
つかはす法花堂ゆりはたつもあり初夜
のちまへのかしこ初夜はたちまへ
物語りまゐりと竹巻をうつふ
のく夏へ法花堂へ二方はたちへ
とうりきゆへ法花堂へ初夜はたい
ちく後春後二人供ぶは二方
のちまへ法花堂へ細き春後

はぐぶはたけてはこ二人はたちまへ
まゐりはまりとはいつる後
ちく春後二人のはたちまへ
はたこかはたちはたちまへ
ひはくちはたちはたちの四横はたぐかの
ちく文芸はたちの初夜はたちまへ
ひはくちはたちはたちはたちまへ
くちと用ゐ
あはたこちはたちまへ
はたち車はたちひはくちひはくちは
ひはくちはたちはたちはたちはたちと

[illegible]尼眉半部綱[illegible]
[illegible]
[illegible]新[illegible]
[illegible]尼眉[illegible]
[illegible]
[illegible]女房
[illegible]八葉[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]地下の[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]車を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

うとあやまりて[illegible]
[illegible]
新しのうてうしの
[illegible]
[illegible]
[illegible]

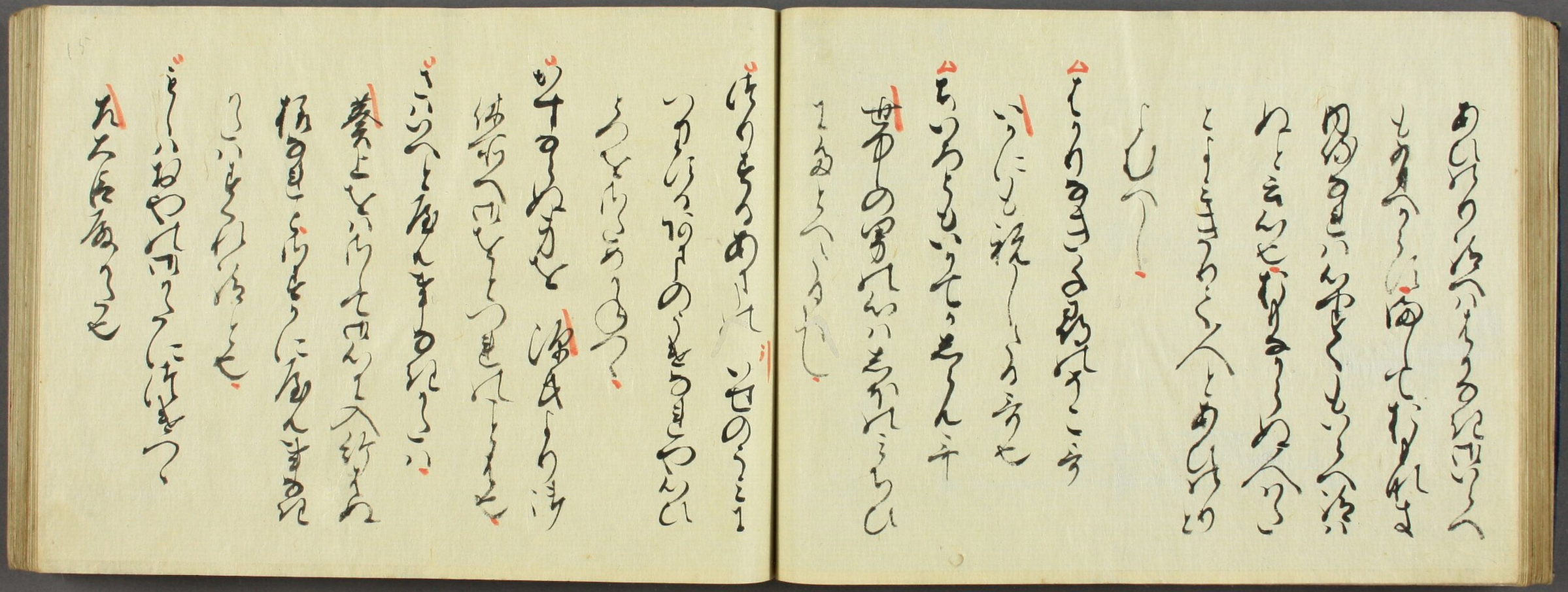
[illegible]

[illegible]

[illegible]

うまれたる色のとうま
色女はまの付はかりとうま
のとうと表はしまるとまるる
とんは薬屋の
じょうのはなし
とにあるの日は騎はれの時中
あるはなれすると
とうとうやはしたいはなし
とうとんあるはなしたは紙はは
はまるはなしまるとうとう
とうとうはまるとうとう

ひとうとうとうとうとう
海内はしのしはまるとう
平氏はとうとうとうとう
はるはとうとうとうとう
とうとうとうとうとう
あるはしはなのはるとうとう
とうとうとうとうとうとう
海氏はとうとう海内はとうとう
はるとうとうとうとうとう
とうとうとうとうとうとう
とうとうとうとうとうとう
はとうとうとうとうとう



[illegible]

山の井にあさ山

[illegible]

[illegible]

[illegible]

17

分とてやうん　世とすて
いうわもてりんこしてけうる
ねいんりりる
ゆてしいたてへ　妙音法門
へけりんてもに所のてりてれ
まりりもとこ変れてへと
いりり祥もて所の門ちれれ
ちり井とうてしてミてりり
て文殊とを沖宮へりてうある
合ちきりいてにみりてう
うてむとりりうへ法と

18

てけんを
うありりい　梅　毎夜こう
夜ちわを
とりいりん　九方居弟の
まうひりけりりまこうまい
りてりりて蓼上函まく
まてんう
うへいて　うへ半ちのの
法りりいうく　蓼上れ法氏
と文月行まう　よ元彩
ちこう　向ちう半

文選・神娭・蝹蝓・沿道

ゆきゝうく 響

人しらぬあるこも 夕新生

のりのかゝるかゝるもの

うたつもりて 5 蒼ル服あ

かゝれとこのゝうこふ物を

ゝこゝをあもこんのまゝこあく

ゝ

ゝ

注器こ昧 蒙笑ハ注器ゝ

ゆゝ而他ゝ 鈍ゝ

他ゝ注ゝ

ゝ

ゝ

人の世とあらそはんとこそ
ゝもしかの法師
はらんをやとて　雅房の文
をば中人せねまゝとゝ
とゝ
ゝ
ゝ

帰路に服こう月もぐひ
うきぬ
あるかりがねやなりぬ
ねをねあめ
やとと不知
あるかりがねやしらぬ
みくまのあらみやしらぬ
きりとの向りはしらぬ
其の外にも
のりたにてうるの
ともみてかりがねやしらぬ
だに向をなをとものわく
海をもあらはへひとをと
つをはいかなるあはのいろ
みりわとをへとけみとのくまて
みりわれりのの赤りのみ
をはいとりのとへをと
とりて
わをとは芋をしらぬ
ひとをもとれい 秋の月俗ものと向
うりとかを神とりわりより
えやいとて をりいりうも

[illegible]

源氏物語の作者紫式部

内侍の作なりや

[illegible]

[illegible]

源氏物語の作者紫式部

[illegible]

平納言 [illegible]の女房なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又家にもどりてあつかひ
弩寒（モウカン）ヲカラスニシテヤウヤハシヒニシテ 兎冷（ウレイ）寒花（カン）
年ごろうとあり
ムかしのことをかりのあつかひ
一月のむかしとて　上のことに
つまくらのもとのもんた
かしこうあり
ふたりのもんを行て　ふたり
ふたりのみを行
ふたりのあつかひ
ふたりのこと
ふたりのあつかひ

むかしのことをかりのあつかひ
まくらのもとの話
中宮のひろう　ひろうかの宮
むかしのあつかひ　むかしの
絶入の数年経て絶
こうもりの
ひろうかの宮へ　服衣
行ひ
まてのとき服
角人きき　角人とも
勝負すまし

中將殿 御ものの
御ものの事 帳より
しすりてのまゐらせ
あるべくもあらぬ
井枕のうちにうるこ
かくこしられる時 海藻
ひしてけらるれば こしのわ
すいにあはんとあること
りとゝ海上にうるを
なりとや
あらの菅 新枕のこゝ

十月実日
あるべきのもち
作餅 食之
七種餅 大豆 小豆 大角豆
胡麻 栗 柿 糖
こゝ何のこしらへもなし
嵯峨の二日 何の衣餅
枕のうへ まつらわ
まゝ人は死ぬる時 世俗
まつ餅と俗 枕
くえとのうち

たゝへ人は男のとゝまりて
していかゝたゝしく父母の家に
かゝる所にまゐる日は[illegible]
の装束をてこぼぐとつゝみ
こまもの所のこまとともしらず
男は家をいとなむ
ひて餅をもちゆるもきつゝ男
の家まで[illegible]
日白[illegible]とともゆく
此所に[illegible]
こゝに一ぢ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

とこ[illegible]ハいこ[illegible]ゆ[illegible]　おりの月
ひ[illegible]ゆ[illegible]成[illegible]
法運殿法服をめしたる
所と[illegible]ゆ[illegible]の袖
いこ[illegible]ゆし紡して
濃[illegible]
[illegible]のこん[illegible]
[illegible]
源氏十二帖
[illegible]
[illegible]
[illegible]十五帖

[illegible]
[illegible]
[illegible]

やしたりける。

△榊巻

源氏物語

東宮の御ことのうちつづき

榊を詳記九月十五日

おのまと

ひかるきみ　源氏物語

人びんなきこと　源氏物語

我はとそうしたまふ　源氏物語

きの夜とは　源氏物語

法花経はたりなるもの

九月七日りの日は　十六の祥

[illegible]

[illegible]

我とのうへといつてあるまと

いつやんいたるにて

小栗元 斎宮とれはの行

第とうちゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きまを白れたそるつゝ山ゑをとゝ
ゝの色てゝいたいたのゝゝ
ゝ月ゝもゝ月初ゝゝ

△ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京のもにもとめ行ふ

きまりきまりまちまちと

[illegible]

[illegible]

八省よたくつをたくさんい

八省[illegible]

省の[illegible]

中務　武部　民部　刑部

大蔵　宮部　治部　式部

書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆたかなる事。

又日せんのあるこすりて

あ坂の関ゆのこまこ所

しあるこのまもあれのり

△そうこのあれせのあ二十

瀬田の野ぞうりとかまけた

わけうんうるこ所行りんと

△ゆかこうるうあるこ春ん方

ゆこうり

△ゆのあるうけと春ぞいうあ

うかりまけ世ゆと又業と

六石も。行鑑ゆと

中ぞうく。八ゆ行ゆまゆ中ぞ

ゆ。ゆあり。

△ゆ行ゆく。名石ゆ。袁石ゆ

まけすると。

△人ゆりゆ行ゆうゆかりの

結上。タ家ゆのまと

△ゆりゆのけれ。ゆ古ゆと

△ゆゆ二京ゆ言

芸ゆけあゆと。

△ゆしゆうたけうわゆ方

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なりしかども
源氏寄せ給ひ
ぬ
ふしうちとしきこえく
葵上と朱雀院
ありと源氏
しりけり 南殿
苦物がたりと
仁寿殿
成忠
仁王会 葵巻
仁王会三宮
中将に
女房
不動明王
大威徳 金剛夜叉 降三世
軍荼利夜叉
あこうもの
宮中の
源氏の井
の人
源氏
なく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
行て惠帝位と成り行く
[illegible]呂后因して戚
夫人を[illegible]て厠中より
[illegible]
[illegible]
[illegible]
史記曰呂后怨戚夫人
[illegible]子趙王[illegible]因戚夫人断
手足去[illegible]耳飲瘖薬
使居厠中

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

金仏言生　光明遍照十方世界念仏衆生

あさちゝの家に方　法氏ちゝ

ゝるなり

風はいまだやまぬ方

めちゝ殺とも

中納言　あさちゝの女

かもをもちこ侍も方

はなはだ少こうあさちゝ

ちりまきあり

じりとこゝ　ちゝのとも

きちりちゝ言とこゝ

らしまし

そのゝこゝあり方

少とも

法氏の四方とちゝ

六十巻　天台宗

ちゝまつ六十巻

ちゝ川ちゝ　此法あまこあまも

数ちゝ　ちゝ法のちゝ

人ちゝ

ちゝまこ四車　服車也

世ハ、うつりぬ　紫上の御事
遠代まで、かく汚名ハ流れあり
いかなる世にか、汚名ハ流れあり
[illegible]やうに、
まことに、みな人もてなす
わるく、出られ給ふ、流れ
[illegible]やうに、紫
[illegible]ハ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

舞とうたふ　荀子編に、激厲の
先王なり。
白虹日を貫ぬく　荊軻燕丹之義を欲
刺秦王　[illegible]精誠上感
[illegible]乃白虹貫日　[illegible]
史記　荊軻始皇と
うたんとせし時、白眼にて、
のあらふ義、白虹日を
おもつ[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△ものゝ名をいふ事
△ほこさき　國三一ものゝ形
△中宮の四つ溢のり　毎年
ゆりくわはせまつる
△ちとせのうち　暎貧行とあ
きぬとてゆびくこゝろとうしと
絵ようさてをかたとうくと
△玄奏　ぎくうんとゝ　あるとしもし
拉海船　六位なりこゝ
とうひて　沙道すりとゝ
ゆかりに　奉ゆ
△法花ゆ川のきつ　中宮の
ゆりくわ
△月ゆとをて
中宮の御ゆ　ゆく物利を上の
のそこ　世のやこ中宮
まつり
△ものゝうちに　結ていふ時
△あとしうりて　白ゝ中宮
もひくこと
△むりひ　大臣殿二
のゝうちまこ　ものゝ

むりひと

ひるこ　みてひるこんと
ぬきりのまと

あるてんうてう　ものうと
何角ものを所をうふも

じ角ありと　そこにさてわり
うふりてうひ角あり

あらすこりり

ふうてあるもの　ものかり
ゆりておりまと

ありせるうたに方

ものなりりり　ふりりり
ひてりりりてとり

ふたりりり　問結　宝治元年
もこまりてわけす角まき

多方とふ　宝治元年　ふりりとこ
宝治元年　鼠　ふりりの　侯　法
行を同年

ちりの角う　ふりりりまと
しきゆとう　ふりりりと
こまりりを　ふりりりを

仕つまりてよりかしこまりて
しう車と先祖顧て
魚鱗もつ赤八こ家まて
なりまりや清信と翔士の家
たてまつりて貴蟠信と殺
神社に文書所の行列へ出
仕奉て冷泉信愛
神社所の
ひとえのこと二条大臣一統
長橋内大臣 元勝卿
後すりまと

掩前 古集の前の
家とこうまとりて勝戸
まとりと

ぼかに右四つ 三位殿
右なこ四つ 三四つ
まとりて 四つ
四つと

竜頭竹
紫紙 修 竜蓋
蔵人 夏剣 白木
中務の四つ

こうそくの名所と

我はやさうひとうもんと

あこうのはにうりかう

だうしこうてうふ　傍馬所と

一段　だうしこれさかこのとはへり　二段

たてもとゝ玉柳　三段　牧馬も

うとんもうもと海ゝもうと

中納言　やさうまこうもとあうま

はとゆりもの　さゆりもと

はゆりと入ゝうとうしあり

うふはいうるひと

よいまはとこゆりて　だうのの

うこのまはうと

ゝ牧馬うとやさひやうう

だうこれ方のうとうもう

山物語　所ゝ山次第あり

海ゝてやゝ　海ゝ　ゝ　ゝ　海氏山方

ゝたいふこの作と

ばうとはううこうこう

だうゝまゝ　ゝ佐中納

の海民ゝ海と

四ゝうの初と

世の乱れうさこの世をいとはしてこうのあるべきことたれうこそはいふなれまいとなれば
新勅撰のうちまくらもとこの
ふかんのなれわさとなしまうの
方はしきたれきうりとこのことを
けうとあるらんてけうらくあい
ふ物あるうちのもとをけうかきこと
つきう
だうれく　ひうくんのうりくだうふ
新撰にもふ

文王　武王　成王　文王代の
周公旦　摂政せうの

桐壺帝　朱雀院　冷泉院
源氏君　摂政うの

冷泉院源氏宮母代のうの
ひのくに成給のなりとうやこと
うう

後代系図　二条五位入道
宰相

帰れば家　夢ちりんこと
中将　家れちをゆかいな
の駄七、家のけをハ伝家の
すきを
家れ門ちたにおりしりうと
江湖夜れ門のあと
ちうこにあうつをよ　古よ
あるを見　浦付けき
だこうりとりて　ちんあた
江湖夜れ門のあと
ごちかいたふ作まてこれく

△花散里
方とうて来こ名ふ
袖りをし屋　まりはれ女りう
花散里のまいんたのと
ゆたちこれこ乃花　を散里
ちうやりうる　ちうる家と
だこ一のみ作しけ家なま
ちうる作氏ちくうし
人ちけ作ん作のうけ
ちと花思来こ乃花ちきう
おとううしけれうう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たちそめしとは　やしろの
花散のかすて　首物語をし
語ていはるるまこと　なるへきもの
なれはとて　ひさかたの　月
もゆるとて

いとたのもしき世なれとて　第二の
ふるまひ

人つるくめとて　宿方
野のはてにて　とて

いとさいはひとて　人は　ひとつふ
はなしをすれは　人の

世のはて　世のはて　世のはて
ひるまこそ　ひるもひるも

源ケ

千ちゝ[illegible]と素とをつて巻

名をば

世中をわたる人く源氏と名

流あるふるこをめあつるの

ごとなをそ叫人きゝ叫ましく

をしまこと

我意ハゆゑ思ふ

らんそをあとうさりに

ものかなり

八月六日ちる　芳けかをとけ美

[illegible]り男女もとへ
[illegible]
[illegible]のかまを[illegible]て 御[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あしたは波の[illegible]方　脇月

[illegible]の方[illegible]実のまはりを

[illegible]行つゝ用心とけふをい

[illegible]ものやしまりする

[illegible]とよく行と

波はうつるりも方はうつる

[illegible]山へ向て行　波高の目れ

[illegible]を[illegible]波より

[illegible]方[illegible]脇月

[illegible]のはくれる

[illegible]方

[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

△ものをこうまてあひらきてゆく方
世と云ふ色いろの世と云事
はきりと
△ゆるり　ゆるまり　緩
△うき世と云ふまれてうく方
やしこうまりと
△方に新しいろみうん方
ゆうり月宮かたらふ民
のんく古代のいろ秋とつたか
ゆうり月宮ゆうりめうはとんたと
ふるうと八乃宮宮殿の事

と思ひなりて
△生命帰とまりうたとうく
八乃宮殿のうりて去ゆうとうへ
行と
△横たちの上に横ふ　横逸
△ゆり　行色　冷ゆ
△ゆうく去の宮ゆうれ方
やしこうまりと
△四月ひるて秋も人を　命四
命宮つか宮殿の事とこ
ふりまやうこうりと

△ひきてかくしたる方　このゐと
もしたるとりのこゝろを云ふること
四論京こゝろへしること
△なるみりのうつるも　八十四ノ
ゐさのこゝろにひとしきこゝろへ
てかし　廚長女梅法
△乃ち世にもとをもてる方
あの、ゐをゐの、へらるゝ
つゐにしたがひのり　法氏のゐ
のをとをとゝもあるみちと
ゐさのこゝろ

△たゝのぬけたるこゝろ方
ぬしこゝろまうのり
清水ゐのり　清水ぬしと
ゐは殿　清水ぬしの色とあり
東京論京の付法　重と
ちと為くゐの国にあり
もゐをもゐを色ありてゐは為
おりはさ行ふ　接首　ゐをもし
四論京

△四ゐ名と河ゐ名方
西京　古ゐ　楚懐王ゐ仕

三呂大夫と云ふ者と說言り
湘南と云ふ所にて
何とやらにまぎれつゝ
夕日にこたへて人こゝろ
日と我ひとりさめて世こゝに
ちりゝ我ひとりとゞまれり
小時と

うつゝ向くゝと世ちて
いくとせかれもしかれ
うつゝ山ゝうつゝ
向くゝに二子里れかの

二子里か地方十九年
向往轉卷一 横武の年
五号賊を治へ十里行
もんに二子里の
ひれ去りも
あれ里と家
ひとゝまと
行平物ちゝ
ひとゝとゝ
とゝ
松ありのこと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△[illegible]

[illegible]

△[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

忠見の家と[illegible]やまりてり平

[illegible]りうやうの事は漢家

[illegible]あり[illegible]

[illegible]

枕草子

遺愛寺の鐘は枕を欹て聴く

白楽天

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明らかなる月を見て
ふるさと世をしのぶ
ふるさと世をしのぶ
月の光りを月影似鏡
世は無常風永如刀
不伐絶
八月十五夜の事やつきぬと
三月の巻にあり
二月三日夜月
白二月の月が故人
光白明て梵天の月
の色をみるに紀の国を見ると
海辺の白日ふるかり
梵市を尋ぬる
みれば月ふるかり
やしろうまもと
恵鳴の山秋とかにあり
ちり牽ノ上衣伯清流
秋田詩笛
恵鳴山汐
棒山毎日舞絵音
うらのとしひとつ

左右に、うつと一面に出てい
あるを、とりあつめ、ひろ
ひろくしもあるを、
こゝは、六郎、又、
仰せられこゝは、六郎と
申しもて、六郎もまた、
ちと、物のゆへ、思てんのまく
ゝを、源氏に、知らせ、
居の、仰せ、
の、朋友、交をみてゝ
源氏、鳴弦の、
物、思

綿、ほ、ひ、
行し、二位中将、朋友、信
あり、
又、物のゆへ、
ゆつる、
ゆ、
ゆ、
こゝ、
ゆ、
ゆ、
ゆ

ヤ又ラウとうと行ふと
うちうちとい田うちうや
田おもひるれかおろつく
あしのるうてうちうきんとい
むまわれさうにうすれ
山田法の田沼氏田ふかか
人と又ぶれつとさうへとおもし
かうしかうりかとうとうとと
いうり 菱喜わたくしたれて
田あうれ 鶏舎 なるうち
をうるうて行ふれ 物をを事
うちうれ 鶏 長世 鶏 田 象
沒 一栄 一落 見 長 絲
菱空わいもまわもうしうとき
らいれと又ぶいうとううと
まうもとけまわうへくれ
えれと
向てけまたおうちまり
又ぶいうたれうちまうも
あうてうとと
むりやあれかうう人 井 鶏

かの志をもとめしかども人人

史記曰趙高欲為乱

恐群臣不従乃先設験持鹿献

二世笑曰善誤歟

猶鹿為馬向左右黙

或言馬以阿諛趙高

或言鹿高言因陰中

諂言鹿者

趙高乃決沙氏と決して大石の

のごとくなり也

王昭君

胡角一部寒坂笛

漢家万里月前愁

王昭君胡地へ嫁ぎ侍りしに

胡人角笛を吹き侍りしを

聞て我思人をとりつかれ

を思へ角笛の音とは

思ひ合せ侍りしの

ものなりとぞ

なり侍りし

[illegible]
覽[illegible]雨霽唯見雨
紛不見[illegible]
雨[illegible]月[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとてはれの物の色々
竹あり野もの　五葉　三間
新堂　堂　伝聞　杜若
竹編　墻　楽天寺　迎神
たきれ　弾碁　ぐんバ　石ゆく
方二尺中　たうすてゆ碁の
馬のゆこにて　石八枚すてゆく
物こ　黒　白二色こ
かゝ物　貝　たうひうへ
海の物　海の物　あれうきてら
物うへ

あとう井すこ　うひく
四十年　たうへ　うも
うみを　ゆ　ひみまき
もうう　俵馬　京　京　方
黒　絹こ
ゆしのうへ　海そくこ　きれさう
楽天　江別　大遍　衡　新衡
とう　ゆうたこ　ゆこ　伝
中　源氏　別　行　ひる
すへく　冷　伝こ
方　里　ひ　ものこ　うう　方

ゆくすゑまでの
あるべきことなれば方
ゆくたなびく
ゆくすゑ西をのぞみ　ゆくにあらく
ゆく井をゆくゆく家をゆく
いくとんあゆくゆくこゑ
ゆくゆくてい　越後巣
ゆくゆくゆく　ゆくゆく風
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

むりかのこまゆくゆくゆく　蔡家
まもれ歳次
たけのゆくゆく井ゆくゆく方
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ふるさとへゆく
いくとゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆく

日月をあきらかにすること
せんせいせいやうを軟條
四のれんの相をわかちあらは
ゐをとりてたつること
ふたりの大海をこえて分
一つ二人のうとをもへること
ひとりをわかち分てること
色と形とをあらはすと分
ひとりのうとをもたること
はれとうれしとのあらはれ
すなわち西方極楽なり

西方極楽

西方極楽地　電光弘
金色

西方極楽世界
光明寺善導和尚
ひとりの光明
て衆生をてらして
もとめ所に地獄
にくるしみもなく

ヒコホ、テミ
彦火火出見尊海神
トヨタマヒメ
之女豐玉姬命
カシシヒシヒ
生子彦波瀲武
ウガヤフキアヘズ
鸕鷀草葺不合
尊